

花火と一緒に散ったのは、 あの夏の記憶だった

邑上主水 Mondo Murakami



アルファポリス文庫

CONTENTS

「花火と一緒に散ったのは、あの夏の記憶だった」目次

第一章

記憶喰い

5

第二章

記憶巡り

54

第三章

記憶違い

143

第四章

記憶探し

245

エピローグ

306



第一章 記憶喰い

ときどき見知らぬ女の子からキスをされる。

などと言えば、男子諸君は「はいはい、リア充自慢ね？」と怪訝な顔を見せるか、その幸運にあやかるべく詳細を聞き出そうとするかのどちらかだろう。

だが安心してほしい。俺こと杉山秀俊はそんな幸運の持ち主ではないし、女に困らないモテ男というわけでもない。

残念ながら、キスされたのは夢の中での話だ。

それに、世の中には明晰夢という、夢を夢であると自覚しながら自由に歩き回れる、まさに夢のようなものがあるらしいが、そういった類のものでもない。

日々悶々としている男子高校生であれば一度や二度は経験しているであろう、夢の中で欲求不満を爆発させたという他愛もない話だ。

俺にキスするその人物の顔には譚がなかったって、どんな容姿なのかはわからない。だが、女の子で、それもとびつきり可愛いことは、なぜかわかってしまう。

夢というのは本当に適当で都合がいい。

この前は住んでいる駿河町の夏祭りに彼女と行っている……なんてありえないシチュエーションだった。

その子は俺の手を取り、振り向きざまに夏の向日葵のような笑顔を見せてくれた。まあ、いつもどおり顔はわからないのだけれど。

自慢ではないが、十七年の人生で女の子と夏祭りに行った経験はない。だからこそ、夢に見るほど憧れているのだと思う。

欲求不満が具象化した妄想——そう考えて割り切ってしまえば、なかなか良い夢だ。ただ残念なのは、次はあんなことやこんなことをしてみようと考えるけれど、いざその夢を見たら綺麗サッパリ忘れてしまっているところだ。

夢の世界もそんなに甘くはないのかもしれない。俺の夢なのだからもう少し甘やかしてくれとあの女の子に言いたい、言えたところで結末は変わらないと思う。

そう、夢は決まって凄惨に終わる。

どこからともなく現れる白い車。それにはねられた瞬間、いつも目が覚める。

あの車は忘れもしない。夢の世界ではなく、現実世界で俺をはねていった車だ。

女の子からキスをされる部分は曖昧にしているくせに、車にはねられる部分は忠実に

再現するなんて、どういう嫌がらせなのだろうか。

まるで「こんなくだらない夢を見てないで、現実を見なさい」とあの女の子が言っているような気さえしてしまう。

夢の中でまたあの女の子に会ったら言ってやろう。くだらないのはこの夢じゃなくて、現実世界の俺の人生のほうだろうと。

まあ、そんなことを考えていても、あの女の子に会ったときには綺麗さっぱり忘れてしまっているのだけれど。

*

「つまり杉山くんの言い分をまとめると、企画の件は綺麗さっぱり忘れていたということだね？」

俺を見下ろす河原崎が、冷やかな目でそう言った。

「いや、別に忘れていたってわけじゃないんだけど」

俺は少ししどろもどろになりながらも、そう返す。

「そう。なら、どうして杉山くんは企画を持ってきていないの？ 今日が企画会議だっ

て先週言ったわよね？」

「それはアレだ。期末試験の勉強が忙しくてだな」

「勉強？」

「そう、勉強」

「杉山くん、勉強していたのに赤点ギリギリで」

「すみません勉強していません。企画の件もすっかり忘れていました」

これ以上言い訳しても墓穴をさらに深く掘るだけだと観念した俺は、河原崎に深々と頭を下げることにした。

河原崎あかね。俺と同じ私立眞白学院高校の二年生。

三つ編みの黒髪に黒縁眼鏡と、優等生を絵に描いたような女子だが、そのおとなしそうな風貌からは想像できないほどの行動力と絶対的なプライドを持っている、俺の最も苦手とする相手だ。

彼女は新聞部部长にして、年八回刊行している校内新聞「マシロタイムズ」の編集長を務めている。眞白学院は陸上部で有名だが、新聞部を陸上部に勝るとも劣らないほどに有名にしたのは、ほかならぬ河原崎だった。

まず入部して最初に、校内新聞を「明晨^{めいしん}」なんて硬い名前から、「マシロタイムズ」

という世界を視野に入れたような名前に変更する。そして直後、全国高校新聞コンクールで文部科学大臣奨励賞を受賞してしまう。

もちろん、名前を変えただけで受賞したわけではない。同時に彼女は、苛烈^{かれつ}なほど記事作りに情熱を注いでいる。例えば、ネタ探しのために全校生徒に取材をしたらしい。

そんな河原崎の手帳には、クラスメイトですら知らない情報が細かくメモされているという噂さえある。

学校一のイケメンである男子バスケット部主将の極秘情報を手ししようと、数多くの女子生徒が河原崎に商談を持ちかけている……と聞いたこともある。

さすがに誇張だと思っていたけれど、その考えは改める必要があるようだ。

まさか、俺の期末試験の結果まで知っているとは。

上位一〇人しか公表されない結果をどうやって調べたのだろう。職員の中に情報提供者がいて、スパイ映画のようなやりとりが行われているとでもいうのか？

「ひとついいかしら、杉山くん」

「なんだよ？」

「申し訳ないけれど、忘れていたと正直に答えられると拍子抜けしてしまうわ。男ならもうちょっと言い訳しなさい」

「いや、男だから潔く認めているんだけど」

「これから杉山くんの大罪を、一記者として根掘り葉掘り追及していく予定だったのに」

「追及しても面白い話なんか出てこないよ」

「何を言っているの？ 面白くない話でも面白くでっちあげるのが、私たち新聞部の役目でしょう」

「河原崎って、さりとんでもないこと言うのな」

そっちこそあきれられるわ、と胸中で突っ込む。

企画の件とは、マシロタイムズの夏季号に載せる特集のことだ。

一週間前、「編集会議を行うにあたって、ひとり一案は特集企画を出すように」と通達があったことは、おぼろげに覚えていた。

人の記憶とは都合のいいもので、自分にあまり関係がないと判断したことはすんなり頭の中から抹消まっしょうしてしまうらしい。そういう自覚はまったくないのだけれど、俺は新聞部に所属しながらも、マシロタイムズの企画なんてどうでもいいと考えてしまっているようだ。

「とんでもないことのついでに言うけれど、杉山くんのことだから企画の件は忘れているだろうとすでに予想していたわ」

「さすがは河原崎編集長。鋭い洞察力をお持ちでいらっしやる」

「でしょう？ 私のジャーナリストとしての才能は、隠していてもわかってしまうものなのね」

そう言って河原崎は、新聞部の部室としても使っている図書室のテーブルの上に、数枚のプリントを置いた。

「……なにこれ？」

「部員のみんなが出してくれた企画案」

河原崎がその中から一枚のプリントを俺の前へと差し出す。

「予想していたから、先手を打って杉山くんに仕事を用意したの」

「仕事？」

「そう。もうすでに編集会議は終わっていて、企画は『夏の怪談特集』に決まっているわ」

「え、マジで？」

どうりで他の部員がいなかった。

図書室の窓から見える空は、ようやくジメジメした雨季が過ぎて、綺麗な茜色あかねいろに染まっている。これから編集会議をするにしては少し時間が遅いなあ、なんて考えていた。

大切なマシロタイムズの編集会議だというのに、俺ぬきでやっていたのか。企画の件を綺麗に忘れていた俺が言うのもなんだが。

「というわけで、杉山くんには夏らしい怪談記事を作ってもらうことにしたから」

「は？」

思わず耳を疑ってしまった。

夏らしい怪談記事。

怪談とは、幽霊やお化けを題材にしているアレのことなのだろうか。

「学校のOBでいらっしやるミステリー作家の山形ノボル先生にあやかっつて、ミステリーじみた怪談であればなおよろしい。昔から、ここ長崎県坂江市にある怖い話とか不思議な都市伝説……そうね、妖怪譚みたいなものでもいいわ」

「いやいや、ちよつと待てよ。急にそんなこと言われても無理だよ。そもそも校内新聞で怪談特集なんて」

「はい、今すぐその薄ら汚い口をお閉じなさい」

河原崎は軽く俺を罵倒しながらテーブルを叩く。

「言っておくけれど、これはある意味讓歩なの。正直言つて、やる気のない部員を在籍させておくほど、新聞部の懷は深くないわ」

「う……」

「杉山くんの事情はもちろん理解している。だけど、他の部員への影響も考えると、私は新聞部部长としてそうせざるを得なくなってしまう」

そうせざるを得ない。つまり、俺を退部させるということだろう。

俺にとつて部活をやめさせられることは、眞白学院を退学させられることに等しい。

というのも、何を隠そう、俺は眞白学院に試験免除で入学した特別待遇学生……いわゆる特待生なのだ。

念のために言っておくと、新聞部の特待生として入学したわけではない。スポーツ特待だった。

なのに、なぜ今新聞部に所属しているのか。そこには、思い出したいくない理由がある。俺は中学校時代、短距離走選手として全国大会に出場するほどのランナーだった。坂江市の杉山秀俊といえ、中学生ランナーの間では名の知れた存在で、「将来の夢はオリンピックに出場することです」なんて恥ずかしげもなく公言していた。

そんな折、眞白学院から「特待生としてうちに来ませんか」とお声がかかったのだ。

眞白学院は、オリンピック候補にも選ばれるような有名なランナーを多く輩出していて、ずっと行きたいと思っていた高校だった。素直に嬉しかった。今思えば、あのとき

が人生のピークだったのではないかと思うくらい、最高だった。

だが一年前の夏、早朝のジョギング中に背後から来た車にはねられて、左膝の前十字靱帯^{じんたい}を断裂してしまった。

俺の陸上人生は最高潮を迎えようとした瞬間、あっけなく終わってしまったというわけだ。

足を見込まれて特待生になったのに、満足に走ることができなくなったのだ。普通なら、即退学か特待生の権利を剥奪^{はくだつ}されていただろう。

しかし、原因が交通事故であることと、陸上部顧問の後藤先生^{ごとう}の口添えもあって「部に所属しているのであれば、特待生として在学している」ということになった。

そして所属したのが、陸上部と同じく、後藤先生が顧問を務めるこの新聞部だった。

何の冗談か、走ることに明け暮れていた俺が、退学にならないようにペンを走らせることになったのだ。

「とはいえ」

と、河原崎はため息交じりに続ける。

「杉山くんひとりでやらせるのは可哀そうな気もするから、パートナーを用意してあげたわ」

「え？ 誰だよそれ。いいよ、ひとりでやるから」

正直その部員に押しつけたところだが、退部がかかっているのであればそうも言えない。とはいえ、誰かと一緒に取材したり記事を書いたりするのは面倒でもある。

「そう言わずに、彼の力を借りなさい。彼のポテンシャルを引き出せば、今回の企画は素晴らしいものになるはずだもの」

「ポテンシャル？ 怪談に詳しいやつってことか？」

「そう。夏の怪談企画にびつたりの部員。さて誰でしょう？」

らしくなく楽しそうに河原崎が訊ねた瞬間、全身に悪寒が走った。

怪談、都市伝説、といえど思い当たる部員はひとりしかない。

「まさか刈島^{かりしま}のやつか？」

「さすがクラスメイトね。正解」

思わず重いため息をついてしまった。

俺が新聞部に入ったのは一年の三学期くらいだったけれど、刈島こと刈島瑛太^{えいた}はずっと前から新聞部に所属しているクラスメイトだ。

洞察力があつて知識が豊富。想像力豊かで真面目——なんて言えば、どんな素晴らしき生徒なのだと思うだろうが、刈島はお世辞^{せじ}にもそんなやつではない。

簡単に言えば、影が薄いぼっちのオカルトマニア。そして、アイドルのおっかけもしているという、俺とはまったく共通点がないやつだ。

「具体的に何を記事にするのかは二人に任せるけど、決まったら教えて。そうね、できれば今週中に」

「今週中って、今日はもう水曜日なんだけど」

「期末試験が終わって、金曜日も終業式だから余裕でしょう？ 大丈夫、杉山くんアイデアがなくても、刈島くんがいっぱい持っているから」

「……」

いくら俺にやる気がないと言っても、あからさまに刈島だけが頼られると、癪に障ってしまふ。

「わかったよ。俺もしっかり考える」

「あらそう。そうしてもらえると嬉しいわ」

とりあえずこれ渡しておく、と河原崎から今回の企画書を渡された。

そこに書かれていたのは「夏の怪談特集——昔から坂江市に残っている怪談を特集して、地域を盛り上げよう」という企画の概要だった。

発案者は、刈島。その刈島をパートナーにすれば、記事は簡単に書けると河原崎は考

えたのだろう。彼女なりの気遣い……なんて思うのは早計か。

「ちなみに私も別の記事を書くことにしているから、週末は遅くまで図書室にいます。何かあったら相談してくれてもいいわよ」

「それはありがたいね」

河原崎にもらったプリントをカバンに入れ、席を立った。

「じゃあな、河原崎」

「ええ、またね杉山くん」

閉門が近いからか、図書室を利用している生徒はいない。

そんな図書室を少し眺めたあと、河原崎に挨拶を残し、古書のスンとしたカビの匂いに追い立てられるように、図書室の扉を開いた。

途端に、むっとした熱気とともに、蟬たちの声が一斉に飛びかかってくる。

図書室がある校舎の三階からグラウンドが見えた。かつて所属していた陸上部の部員たちが、酸素摂取量の増大を目的としたインターバルトレーニングをしていた。

夏季は陸上選手にとって特に大切な時期だ。トレーニングが技術寄りになりがちな、試合のシーズンが終わわり、次のシーズンを見据えて短期間で体力強化を図る必要がある時期だからだ。少しでもトレーニングをさぼってしまえば、可逆性の原理で体力がみる

みる落ちてしまう。

「まあ、どうでもいいか」

もう陸上競技ができない俺にとつては関係のないこと。

そんなことよりも、目下の問題は夏の怪談を探すことだ。

マシロタイムズでは、地域に密着した記事を書くことが多い。去年賞を取ったのも、坂江市を拠点に世界を相手に活躍する中小企業を特集した記事だった。

地域に関係した怪談か都市伝説。

生まれてからずっと坂江市に住んでいるが、そんな話は聞いたことがない。その手のことに詳しい刈島に相談すべきかとも思うが、あいつに頼るのはやっぱり氣にくわない。「……ん？ ちょっとまてよ」

と、重要なことに氣がついてしまった。

もし刈島にアイデアをもらって、それが河原崎のお眼鏡にかなったとする。そうなる
と、夏休みを使って刈島と取材したり、記事を書いたりする必要が出てくる。

あの刈島と。仲良く肩を並べて。

「はあ、マジかよ……」

今年の夏は、刈島と過ごすことになるのか。

一気に疲れが噴き出した俺は、軽く絶望しながら重い足取りで昇降口に向かうの
だった。

*

俺の朝はとて早い。

と言っても、高血圧というわけでも、眠りが浅いというわけでもない。

陸上部に所属していたときの朝練の習慣が抜けていないのか、起きる必要がないのに
目覚ましよりも早く起きてしまうのだ。

「早起きは三文の徳」なんてことわざがあるけれど、俺から言わせれば、それこそ「寝
ぼけたことを言うな」だ。小学校から陸上競技をはじめて毎日のように早朝ジョギング
をしていたのに、良いことがあるどころか陸上競技ができない体にさせられてしまった。
癖で早起きしてしまう俺が言うのもなんだが、早起きなんてするべきではない。朝が
弱い人間だったら車にはねられることもなく、陸上競技を続けることができたはずな
のだ。

もしあの日、五分でも寝坊していたら。

もしあの日、雨が降っていてジョギングをやめていたら。

人生で「もし」を考えるのはナンセンスだが、やっぱり考えてしまふ。

いくら考えても、人生をやり直すことなんてできやしないのに。

「おはよう、秀俊」

「おはよう、母さん」

パンが焼ける良い香りの中、俺は寝起きの枯れた声でそう返した。

登校時間にはまだ早く、遮光性の低いカーテンの向こうからダイニングに差し込む朝日はまだ半分眠っている。

なのに母はもちろん、いつもは寝ているはずの父も新聞を広げてテーブルについていた。

「父さん、今日は早いね」

「ああ。仕事で少し早く出る必要があったな」

「ふうん」

新聞を開いたままの父に、テレビを見ながら曖昧な返事をした。

父との会話、終了。

正直、寡黙な父が苦手だった。どんな仕事なのか突っ込んで聞きたいとも思わないし、

読んでいる新聞にどんな記事があるのか興味もない。

父は学生の頃、陸上部だったらしく、中学生のときはいくらか会話が合ったが、事故以降は会話らしい会話をした記憶がない。

まあ、父との会話がなくても困ることはないし、別に問題はないのだけれど。

「秀俊はいつもの？」

と、母が台所のカウンター越しに訊ねてきた。いつもの、というのは俺が毎朝飲んでいるアレのことだ。

「うん、フルツイン」

「あんたもこんな人気のない飲み物が好きだなんて、変わっているわね」

冷蔵庫から取り出した派手なパッケージの飲み物をコップにそそぎつつ、母は呆れたように笑う。

フルツインというのは、フルーツ飲料にプロテインを配合した低糖質プロテイン飲料の名前だ。フルーツ飲料のように爽やかに飲めるプロテイン飲料として発売されたフルツインは、ごく一部の人間に絶大な人気がある。

つまりは、おいしくプロテインを吸収したいと考えていた俺のような人間にだ。

陸上部を辞めてもう半年以上たつけれど、フルツインは今でも飲み続けている。運動

せずにプロテインを取っても別に太るわけじゃないし、癖になるおいしさなのだ。
「それにしても、いやになるわね」

「え？」

母がダイニングテーブルに朝食を運びながら、ため息交じりにそんなことを言った。

「いやになるって、何が？」

「テレビの特集よ。少し前に坂江市でSNSが乗っ取られる事件が立て続けに起きていたんだって」

「SNS乗っ取り？」

テレビはぼんやり眺めていたせいで、内容がまったく頭に入っていなかった。

ちょうどこれまでの経緯をまとめる場面になり、途中から見はじめた俺にもようやく内容がわかった。

どうやら過去の不思議な出来事特集しているコーナーで、今回は一年半ほど前に起きていたという出来事を取り上げていた。

タイトルは「一年半前に坂江市で起きた集団SNS乗っ取り事件。その目的とは!？」というものだ。

俺が住む坂江市の高校生を中心にSNSが乗っ取られ、意味不明な書き込みが頻繁に

行われていたらしい。SNSの乗っ取りなんてよく聞く話だが、特定地域で起きているということと、一年半ほど前に重なって起きていて、その後はつたりなくなっていることに意図的なものを感じると、コメントターが説明していた。

以前、なりすましでプリペイドカードの番号を送らせる事件があったのを思い出したけれど、意味不明な書き込みをするだけというのは、なぜなのか。

「こんな事件で坂江市が有名になってほしくないわ」

「ん、心配するほどのものじゃないでしょ」

坂江市といえば、眞白学院の卒業生であるミステリー作家の山形ノボルの出身地として有名で、自治体も彼にあやかった様々な地域活性化事業をおこなっている。彼を差し置いて、こんな乗っ取り事件で有名になるはずがない。

「まったく、くだらないことをニュースにするものだな。いくらニュースと言っても、エンターテインメント性がなければ誰も興味を持つてくれなくなるぞ」

新聞をたたみながら、父がそんなことを言った。

それを言うなら、むしろSNS乗っ取りという題材は今の時代にぴったりだと思う。くだらないと思うのは、単純に父がSNSを利用していないからではないだろうか。

「ちなみに父さんの言う、ニュースのエンターテインメント性って何？」

「そうだな。例えば、『飼い犬が飼い主を噛んだ』なんてニュースが流れても誰も気に留めないが、『飼い主が飼い犬を噛んだ』だったら、興味がわくだろう?」

「……ん、確かに」

父が言いたいのは、「意外性がある事件をニュースにしろ」ということか。

マシロタイムズの怪談記事も、そういった視点で考えた方がいいのかもしれない。

つまり、意外性がある怪談——いや、そもそも意外性がない怪談なんて存在するのだろうか?

「おっはよう! お兄ちゃん!」

「……ッ!?」

と、不意に背後から首元に腕をまわされ、強烈なチョークスリーパーを受けてしまった。毎朝恒例になっている妹、香の熱烈な抱きつき攻撃だ。

「んん、お兄ちゃんは今日も変わらず朝からジメジメしていてローテンションだね!」

「お前は変わらず朝から快晴ハイテンションだな。というか、離れろよ」

小学生のときから伸ばしている栗毛色の髪が絡まってくるし、小顔効果があるというデカイ眼鏡がガツガツ当たって、とても痛い。

「可愛い妹にすりすりされて嬉しくせに。正直になろうよ」

「わかった、正直に言ってやる。鬱陶しい」

「嫌よ嫌よも好きのうちってやつだね」

「全然違う」

どちらにしろ、香は鬱陶しいスキンシップをやめるつもりはないらしい。もう勝手にさせて、朝ご飯を食べることにした。

「ほら香、大好きなお兄ちゃんにくつつくのはそれくらいにして、早く食べて」

「はあい」

呆れた表情で注意する母の声で、香はいかにも残念そうにしぶしぶ俺から離れた。

「パパ、これ何のニュース?」

「坂江市に住む高校生を狙った集団SNS乗っ取り事件らしい。といっても、一年半前のだけだな」

「へえ、集団SNS乗っ取り事件」

香は俺の隣の椅子に座った途端、テレビに食いついた。母が持ってきた朝食に手もつけず、じつとニュース番組のコメンテーターの言葉に耳を傾けている。

「そんなに面白いのか? そのニュース」

「……ん? まあね。多分どっかの暇人の犯行だったんだろうけど、坂江市に住む高校

生だけを狙っているっていうのが、ちょっと気になるじゃない？」

「言うほど気になるか？ 犯人も坂江市に住んでいる人とかじゃ？」

「違う違う。そういうんじゃないくて、乗っ取りつてしばらく使われていないアカウントがクラックされるのが普通じゃない？」
「なのに、現役バリバリの高校生のアカウントが乗っ取られるって変でしょ」

「高校生って意外と安直なパスワードとか設定してるぜ？ 現に俺だって誕生日だし」「えっ!？」

と、まるでこの世の終わりを迎えてしまったかのような悲痛な^{おも}面持ちで俺を見る香。そんな顔になるほどまずいことなのだろうか。

「安直だと認識しているのに、クラックされやすい誕生日をパスワードにしてるお兄ちゃんって……いや、まあいいや」

ずり落ちかけていた眼鏡を上げて、香は続ける。

「安直かそうでないかは置いて、高校生だったら毎日SNS使ってるだろうし、すぐバレちゃうから、変な書き込みとできないでしょってコト」

「すぐバレちゃう、ね」

そういうえば俺も、陸上部に入っていたときは、メールや電話よりもSNSを使って連

絡を取ることが多かった。^{ひんぱん}頻繁に使っているのに乗っ取られて変な書き込みをされるなんて、不思議と言えは不思議だ。

「なるほど、確かにそう言われるとそうだな」

「これは事件じゃないかもしれないね」

「事件じゃない？ 事故ってことか？ 管理会社の情報漏えいとか？」

「いや、これは人にあらざる者が関与している超自然現象だね。間違いない」

「……は？」

俺は思わず呆けた声をあげてしまった。

だが、香は気にする様子もなく、自信満々に小さな胸を張って得意げに続ける。

「人をだますとか化かすと言えは代表格なのがキツネとタヌキだけど、この場合はキツネが関係しているのかもしれないね。一説によると、タヌキのいたずらは人を殺すけど、キツネは殺すことがないらしいんだ。タヌキは舌の先に人の心をのせるけど、狐は尻尾に人の心をのせるんだって。だからキツネは自分の気がすめば心を返すんだけど、タヌキはさんざんだました^{あげく}挙句に心を食べちゃうみたい。タヌキって愛嬌^{あいきょう}があるのに残酷だと思わない？」

まさにキツネにつままれたような顔で香を見つめる俺。香の話に真面目に耳を傾けた

ことがそもその間違いだつたと反省した。
香は超インドア派で、漫画やアニメ、小説に映画とエンタメ系全般が大好きな中学三年生だ。

そこまでだったら「可愛い妹さんですね」で終わるのだが、香のぶっ飛びっぷりはとどまるところを知らない。一般女子であれば拒否反応を示すホラーやスプラッタ、怪談まで食指を伸ばす刈島顔負けのオカルトマニアなのだ。

兄の俺が言うのもなんだけれど、一般的には可愛い部類に属する香が男子にまったくモテない原因はそれだと思う。なんとも残念な妹だ。

「あのなあ、お前はなんでもかんでもそっちのほうに持っていくなよ」

「なんでもかんでもじゃないよ。あたしの鋭い嗅覚が反応したときだけ」

「鋭い嗅覚？ お前の鼻が？ ウソだろ」

香の小さい鼻が鋭いものかとつまんでやろうかと思ったが、先日母がケーキを買ってきたとき、二階にいなながらその存在に気がついたことを思い出した。

香の嗅覚は好きなモノに関しては信頼できる。もしかすると香の嗅覚に頼れば、マシロタイムズの怪談特集に使える噂話を入手できるかもしれない。

「なあ香、ちなみに最近だと、どんなものにその高性能嗅覚は反応したんだ？」

「え？」

俺の質問に、香は目をぱちくりさせた。

それもそのはずだ。いつもであれば、俺が香の話に食いつくことはない。今朝は特別なのだ。

「んー、そうだね。最近はネットで噂されている『あの怪人』かな」

「あの怪人？」

「……え、ウソ。もしかして知らない？ お兄ちゃん、本当にあの眞白学院新聞部の？ アンテナ鈍すぎじゃない？」

「う、うるさい」

「新聞部部員たるもの、常にアンテナは張り巡らせておきなさい」とは河原崎の弁だ。

その言葉を聞いたからというわけではないが、陸上部を辞めてから持て余した時間で、SNSやウェブのまとめサイトを頻繁に見るようになった。香までとはいかないものの、ネットの噂には結構敏感になったと思う。

だが、そんな噂を耳にした記憶はない。

「それで、その怪人ってなんだよ？」

ニュース番組が芸能コーナーになって父が席を立ち、代わりに腰を下ろした母を横目

に、香に訊ねた。

「ん？ お兄ちゃんどうしたの？ あたしの話に食いつくの珍しいじゃん。さては何かあったな？」

「真白学院新聞部部長様から、都市伝説とか怪談を調査しろって勅令を受けたんだよ」

「……へえ、都市伝説ね。なるほどなるほど」

香はひよいと椅子の上に両足をのせ、体育座りのような体勢を作ると、楽しそうに口角を釣り上げた。そして――

「モンブランのショートケーキ」

香の口から出たのは、俺もよく知る名前だった。

モンブランというのは、坂江駅前にある小洒落たカフェのことだ。女子中高生に人気があつて、中でもケーキが絶品らしい。

モンブランと怪人に何か関係あるのだろうかと一瞬考えたが、香の言わんとしていることがすぐにわかった。

「お前、大好きなお兄ちゃんを助けるのに、報酬を要求するなよ」

「むふふ。あたしとしては無償で教えてあげたいんだけど、甘やかすわけにもいかなんじゃない？ お兄ちゃんを一人前の男にしてあげるのが、あたしの使命だもの」

「いや、甘やかしてほしい。でろっでろに甘やかして」

「却下。無料で教えることができるのは『最近ネットで怪人の噂が流れている』ってところまで。そこからは課金が必要でっす」

「……ぐっ」

につしつと笑う香を睨みつけながら、俺はどうするか考えた。

今からネットでその怪人について調べてもいいが、時間がかかってしまうだろう。記事にできるレベルのものなのか吟味している間に、河原崎と約束した週末になってしまいかもしれない。

今はお金よりも、時間を優先するべきか。

「仕方がない。不本意だけど課金してやるよ」

「えへへ、まいどありっ！」

そう言つて香は、ジャージのポケットから愛用のスマホを取り出すと、慣れた手つきでとあるサイトを表示させた。どうやら、ネットに散らばる都市伝説や怪談をまとめたサイトらしい。

「なんだこれ？ キオククイ？」

「ちよっと違うかな。記憶喰いだよ」

そのサイトに書かれていたのは、「記憶喰い」という怪人についての噂話だった。

「記憶」を「喰らう」と書いて記憶喰い。

まあ、名前を見ただけでどういう怪人なのかはわかったが、とりあえず視線で香に説明を求めた。

「記憶喰いは、消したい記憶がある人間の前に現れて、記憶を食べてくれる怪人なんだって」

「ふうん……記憶を食べる、ねえ」

ありきたりな噂だと思った。そういう話は小説や映画でよく目にする。

サングラスをかけた主人公が、他人に強烈な光を当てて宇宙人に会った記憶を消すという映画があった気がするけれど、なんだったか。

「調べただけど、この記憶喰いって実は昔から坂江市にある怪談なんだ。田舎のほうでは今でもうつかり物忘れしたとき『キオクイに食べられた』って言うんだって。その記憶喰いの噂が最近また出回ってて、記憶を食べてもらったひとがもう何十人もいるらしいよ」

「なんかきな臭い感じがするな。怪しいクスリでも使ってるんじゃないか？」

そういった話はよく聞く。先輩や同級生から「嫌なことを忘れられるよ」なんて甘い

言葉^{ごまかし}を囁かれて違法薬物に手を染めてしまう、あれだ。

「ん、少なくともそういうやつじゃなさそうなんだよね。なにせ、記憶喰いは対価を要求しないみたいだし」

「タダでやってるってことか」

記憶喰いとかいう怪人はどれだけ懐^{なつこ}が深いのだ。家族を助ける対価として、ショートケーキを求める女子中学生がいるこのご時世に。

しかし、タダで記憶を消すところ^{ところ}が怪談っぽくもある。坂江市に関係しているし、なかなか良い題材なのかもしれない。

「それで、この記憶喰いって怪人に会うためにはどうすればいいんだ？」

こういった類^{たぐい}のものは、会うために手順を追うのが普通だ。どこそこに電話をかけるとか、ベンチで待つとか。

だが、香はその情報を提供するどころか、俺の手からスマホをかつさっていった。そして、ニヤケ顔でこうのたまう。

「ケーキひとつで教えられる情報は、ここまでです」

軽く殺意がわいてしまった。この小生意気な妹は、家族にどれだけ重課金を要求するのか。

「追加課金は受けつけるけど、どうする？　今なら記憶喰いに似た俗信の情報も追加するよ？」

「お前、射幸心を煽るのは上手いな。将来、男を食い物にするような女にならないか兄ちゃんは心配だよ」

とはいえ、オカルトマニアで空気を読まない香がモテるわけではないのだけれど。

と、そんなことよりも。

ここまで教えてもらえれば、あとはインターネットの力でなんとかなるだろう。これ以上生意気な妹に課金する必要はあるまい。

「もう課金はしない。ここまでで十分だ」

「ちえ、つまんないの。あ、支払期限は金曜までだよ。一日遅れると一個増えるから注意してね」

「ちよっと待て。一日で一〇割ってどれだけ金利高いんだよ。闇金も真つ青だぞ」

ちくりと突っ込んでやったが、香は楽しそうに椅子の上で体育座りをしたまま、ぶらぶらとゆりかごのように椅子を揺らすばかりだ。

まったくもって生意気な妹である。

兄としての威厳を保つためにもここは少しきつく言ってやるべきかと思ったが、「行

儀が悪い！」と母に怒鳴られてしゅんとしたので良しとした。

暴利を貪る我が家の小さな闇金王も、家庭内の警察たる母には頭が上がりならしい。

*

電車での登校時間を使って、スマホでさっそく記憶喰いについて調べてみた。すると、坂江市に古くから伝わる話は見つからなかったが、坂江市の若者……特に中高生を中心に噂が広がっているようだった。

「記憶喰いは黒いコートを着た身長二メートル以上の大男だった」という話もあれば、「白い頭巾をかぶった小柄な少女だった」という話もある。

だが、「消したい記憶がある人間の前に現れて無償で記憶を食べてくれる」ところは共通していた。

香が言っていたとおり、記憶喰いに食べられた記憶は「なかったこと」になるらしい。例えば「好きなひとに告白してフラれた」という記憶を食べてもらった場合、告白したという記憶だけではなく、そのひとを好きだったという記憶も消されるのだ。

記憶の消去。

その言葉に魅力を感じないと言えばウソになる。

もしこの記憶喰いが実在するのなら、俺は迷わずあの事故の記憶を消してもらおう。そうすれば、事故に遭ったことだけでなく、陸上競技をやっていたこともすべて忘れることができる。

もう走れないことを苦しむこともなくなるし、過去の栄光に気後れすることもなくなる。朝早くに目が覚めて憂鬱になることもなくなるし、陸上部の練習風景を見ても「今日も頑張ってるな、あいつら。えらいなあ」程度に思うだけだろう。

人生をやり直せるかもしれない――

そんなことを考えているうちに、ウキウキしてしまっている自分に気がついた。

こんな噂話を真に受けてテンションが上がるなんて、俺は小学生か。記憶喰いが実在するわけがないし、もし実在するならすでに俺の前に現れていてもおかしくない。なにせ、夢でもあの車にはねられるほどなのだから。

「おっはよう！ 秀俊くん！」

期末試験も終わって、穏やかな朝の空気が流れる教室。登校してからもずっとスマホで記憶喰いについて調べていた俺の耳に、やけに軽い女子の声が飛び込んできた。

声のほうを見なくてもわかる。

新聞部部長の河原崎について苦手な女子、クラスメイトの霧島野々葉だ。

「あれ、朝からどうしたの？ 難しい顔で携帯なんか見て」

腰まである長い黒髪を小指でかきあげながら、霧島は俺のスマホをひよいと覗き込んだ。

気がつけば、息がかかるくらいの距離まで霧島の顔が近づいていた。驚いた俺は思いつきりのけぞってしまった。

「顔が近いよ。それに、勝手に携帯見るな」

「ん、見ていい？」

「見てから聞くな」

霧島は中学時代から知る女子だが、幼馴染というわけでも友達というわけでもない。中学三年のときに同じクラスになり、その後偶然にも同じ眞白学院に進学しただけの関係だ。

だが、同じ中学の出身だからという理由で、クラスメイトの男子から霧島についてあれこれ聞かれることがある。眞白学院の霧島野々葉は、他校にまでその存在が知れ渡っているほどの美少女だからだ。

霧島のことを端的に言う。「高校生離れた女子」とでも言うのだろうか。

こんな田舎に生まれていなければ、芸能事務所に所属していてもおかしくないほどの、花が咲いたような可憐さを持ち合わせている。

さらに彼女は、ずば抜けて頭がいい。テストの学年順位トップ一〇では毎回名前を見るし、この前の期末試験では学年一位になっていた。

頭脳明晰で容姿端麗。一見、非の打ちどころがない完璧な女子だった。

だが、霧島野々葉という人間を作るにあたって、神さまは大切なものを入れ忘れてしまったらしい。

霧島は普通の女子が持ち合わせているはずの、基本的なデリカシーが欠落しているのだ。例えるなら、断りもなく他人の部屋に土足で上がってくる、とでも言おうか。彼女は、はじめて会う男子に対しても妙に親しく接する鬱陶しい性格なのだ。

そのため「もしかして俺のこと好きじゃないか」と勘違いする男子生徒は多いと聞く。

気持ちとはとてもわかる。他校で噂されるほどの美少女が気さくに話しかけてくるのだ。経験が豊富な男子であっても勘違いしてしまうのは当然だろう。

しかし、俺は勘違いを起こすことはなかった。

なぜ、女子経験が浅いはずの俺が勘違いを起こさなかったのか。それは、香という霧島に似た性格の女子が身近にいるからだ。

こればかりは素直に香に感謝しなければならぬ。妙に親しく接してくる女子が大人の苦手になったのは、香のおかげだ。我が妹よ、鬱陶しい性格で生まれてきてくれてありがとう。

「ねえねえ秀俊くん、外を見てよ」

「え？ 外？」

素直な俺は霧島に促されるまま、窓の外を眺める。

からっと晴れ渡った空が校舎の向こうに見えた。入道雲がいかにも夏らしさを演出している、なんの変哲もない夏の空だ。

「外がどうかしたのか？」

「世界はこんなに晴れ渡っているのに、秀俊くんだけジメジメとした空気で雨季まっさかりだね」

「よしわかった。お前は俺に喧嘩を売っているんだな」

霧島は本当に香そっくりだ。こいつも将来、悪い女になるに違いない。

「というか、慣れ慣れしく下の名前で呼ぶなって言っているだろ」

「いいじゃん。秀俊くんは秀俊くんだし。それとも、秀ちゃんとか秀っちとか、そういう可愛い愛称で呼ばれたい？」

「そんな愛称で呼ばれたことないし、呼ばれたくもない」

「あ、秀ちゃんが怒った」

霧島はくすくすとうそぐったそうに笑う。

何がおかしいのかわからないけれど、霧島はとても楽しそうだ。

そんな姿を見るたびに、霧島は人生が楽しくて仕方がないのだろうと思う。性格が残念でも可愛くて頭が良いという二本柱があるだけで高校生活は順風満帆だろうし、卒業してからの人生も自由に選び放題だ。

「もういいから、あっちいけよ。俺は新聞部の取材で忙しいんだよ」

「新聞部の取材？ あ、そっか。マシロタイムズ、夏休み明けに刊行だもんね」

「よく覚えているな。うちの生徒で刊行スケジュール熟知しているのって、霧島くらいだと思うぞ」

地域で有名な校内新聞だと言っても、生徒に望まれているかどうかは別問題だ。河原崎が持つ情報を欲する生徒は多いけれど、マシロタイムズを楽しみにしている生徒なんて、一体どれくらいいるのだろう。

「結構楽しみにしているからね。秀俊くんも、前に書いたようなやつ、また書いてよ」

「前の記事？ なんか書いたことあったっけ？」

「ほら、陸上部の夏季合宿密着記事」

「……ああ、あれか」

思い出してひどく憂鬱ゆううつになってしまった。

そういえば、あれが新聞部で最初に書いた記事だった。

顧問の後藤先生から「新聞部の最初の活動として、陸上部を題材に書いてみてはどうか」と言われて書いたものだ。合宿での一日のトレーニング内容をわかりやすく書き起こし、夢や目標について部員にインタビューもした。

「あの記事、すぐわかりやすく面白かった。なんか、キラキラしていて熱があるっていうか」

「あ、そう」

あの頃は膝が完治してまた走れるようになると信じていたから、色々なことに熱が入っていたのだと思う。

だが、半年たって一生まともに走ることができないとわかったとき、その熱は一瞬で冷めてしまった。

今思えば、とても滑稽だ。未来は輝かしいものだと思っていたから、キラキラしていたのかもしれない。今の俺に書けるのは、霧島に「逼迫^{ひっぴく}してて、なんかこの世の終わりたい」なんて、からかわれてしまうような記事くらいだろう。

「あのさ、霧島。新聞楽しみにしているなら、そろそろ取材に集中させてくれないかな。これから企画をまとめて、部長の河原崎に連絡する必要があるし」

「ねえねえ、今回ってどんな企画なの？」

「うるさい。河原崎に聞けよ」

「む。なによ。教えてくれないじゃない。ケチ」

さすがにカチンときたのか、霧島はべつと舌を出してしかめつ面を見せる。

だが気を害した様子もなく「楽しみにしているからね」と笑顔で言い残して、女子生徒たちの輪へと入っていった。

霧島は本当に不思議なやつだ。いつも邪険にしているのに、心折れずに絡んでくる。

「タフ」という言葉は、霧島のためにある言葉なのかもしれない。

……などと考えていた矢先、ぽんと肩を叩かれた。

振り返ってみれば、丸顔キツネ目の男子生徒が無表情で立っていた。怪談記事でパートナーを組むことになった刈島だ。

「よ、よう、刈島」

無言でじっと俺を見る刈島に気圧^{けお}されてしまった。物静かで一見何を考えているのかわからない刈島は、色々な意味で怖い。

「河原崎さんから聞いているよな？ 企画の件」

「聞いているよ。俺とお前で怪談を調べることになった」

「一応聞いてくけど、記事になりそうな題材、ある？」

そう訊^きねる刈島の目は、「どうせ考えもしていないのだろうけど」という内心をはっきり物語っていた。俺を甘く見るなど返したかったが、これまでの俺を見ていればそう思われても仕方がない。

「実はちょうどいい感じの噂話がある。記憶喰いって怪人の話なんだけど」

「記憶喰い……ああ、あれか」

刈島はふふんと鼻で笑う。

「あ、やっぱり知ってたか」

「最近ネットで噂になっているやつだろ？ 記憶を消すとかなんとか」

「そう。中高生の間で広がっているから、記事として良いんじゃないかと思ってさ」

「……あのさ、ひとついい？」

刈島は心底呆れた、とても言いたげな表情で続ける。

「僕の企画書はちゃんと読んだ？ 地域に根づいた昔からの怪談や都市伝説を記事にするって書いてなかったっけ？」

「いや、この記憶喰いって、実は昔から坂江市にある怪談らしいんだよ。田舎のほうでは今でも昔の記憶喰いの話を知ってる人間がいるんだと」

瞬間、刈島の顔が歪んだ。どうやら記憶喰いが坂江市ゆかりの怪談だということを知らなかったようだ。まあ、ネットにその情報はなかったし、知らなくて当然なのだが。というか、香は凄いな。この刈島を超えてくるなんて、将来が心配だ。

「そつ、そんな都合のいい話があるか。それに、たとえそうだとしても、記憶喰いなんて僕から言わせれば低俗なくだらない作り話だ。マシロタイムズにふさわしくない」そんなことを言われて、さすがに俺もムツとしてしまった。

確かに、香の話を書ける情報はまだ見つけられてないが、オカルト系の話であいつがデマを言うわけがない。それに作り話というなら、大抵の都市伝説や怪談も同様の作り話だ。

「記憶喰いが坂江市ゆかりの怪談だと知らなかったからってケチをつけるな」と言い返そうかと思ったがやめた。ここで刈島と言ひ合いをするほど無駄なことではない。

「似つかわしくないかどうかを決めるのは、お前じゃなくて河原崎だろ。とりあえず、河原崎に連絡しとくからな」

「あ、そう。だったら僕もいくつか思いつく題材を河原崎さんに連絡しておこう」どちらの案が採用されるか勝負だとしても言いたいのか。嫌な性格をしているな。

だが、刈島の案が採用されるならそれでいい。調査を刈島に任せる口実になるし、無駄な労力を使わずにすむ。

俺と刈島とではモチベーションが違うのだ。刈島の案でマシロタイムズの評判が上がっても、俺の案で下がっても、正直なところどうでもいい。記事を書いて新聞部を退部させられなければ、それで良いのだ。

「じゃあ、また後でな」

憎たらしい刈島の声に交ざり、ホームルームの開始を告げるチャイムが鳴り響いた。担任が教室の扉を開くと同時に、刈島や雑談していたクラスメイトたちが席へ戻る。

期末テストも終わって、いよいよ待ちに待った夏休みがはじまるからか、教室の空気はいつもより浮ついていてるように感じた。

刈島のやつに苛立っていたせいで、そんな空気が無性に鼻につく。

家族と旅行に行くやつ。友達とどこかに行くやつ。部活動で頑張るやつ。

夏休みの予定は人それぞれだろうけど、みんな楽しみにしているのは空気でわかる。俺も中学三年の夏まではそうだった。

俺の場合は、部活を楽しみにしていた。当時は陸上に熱中していて、陸上競技だけが俺の人生だったからだ。

だが今では、得意としていた四〇〇メートルどころか、一〇メートル走っただけで左膝の痛みで動けなくなってしまう。

まったくの無駄だった。小学校時代から他のものに目もくれず、ひたすら陸上競技に明け暮れた時間は無意味だった。

無駄になる可能性があることは、はじめからやらないほうがいいというのが、事故で得た教訓だ。未来に希望を持ってなんて、人生がうまく行っているやつ^{ざれて}の戯言にすぎない。ポジティブに生きたところで、事故に遭^あった最悪な過去は変わらないし、走れない未来も変わらないのだ。

そんなネガティブなことを悶^{もんもん}々と考えているうちに、いつのまにかホームルームは終わっていた。

終わってから、スマホのメッセージアプリに新着メッセージがあることに気がついた。送信者は、河原崎。メッセージアプリには新聞部のグループがあり、そこに俺や刈島、

河原崎も参加している。記憶喰いの件は直接河原崎に送ったが、部員たちに告知する意味もあってか、回答は新聞部のグループにあった。

『杉山くんの記憶喰い案でいく』

いかにも河原崎らしい一文だった。

文章に高圧的な空気を感じさせてしまうなんて、あいつはやっぱり凄^すい。もしかすると、メッセージに「威圧的な空気」みたいなものが添付されているのではないかと思ってしまう。

しかし、と俺は河原崎のメッセージを見ながら考える。

河原崎はどんな理由で記憶喰いの案をOKしたのだろう。

記憶喰いは坂江市にゆかりのある怪談だと香は言っただけで、ネットにその情報はなかった。まさか、河原崎もとうに調査済なのか。

なんだか気味が悪い。放課後に図書室で確認したほうがいいかもしれない。

そう考えた俺はスマホをポケットにしまい、一時限目の準備をはじめた。

同じメッセージを見ているはずの刈島は確認しなかったが、きつと悔しそうにこちらを睨^{にら}んでいるに違いない。その顔は少し見たかったが、見たところでなんの利益にもならないことに気がついてやめることにした。

*

放課後に開放されている図書室は生徒に人気のスポットだ。

眞白学院は学校法人が運営する私立高校ということもあり、田舎の高校にしては施設が新しい。特に図書室に関してはやけに力を入れている。エアコンはもちろん、防音設備まで備わっているし、「生徒図書委員会」なる委員会まで設けて、市の図書館顔負けの充実した選書を行^わっている。

空調がきいていて、心地よい静けさを保ち、本も豊富。ということとはつまり、図書室は勉強にもってこいの場所なのだ。新聞部の部室としても使わせてもらっているため、黙々と勉強している生徒たちの姿はよく目になっている。

だが、今日の図書室は違った。

勉強に励む生徒たちの姿はなく、本を読んでいる生徒がぼつりぼつりいる程度だ。

何かあったのだろうかとしばらく考え、つい先日期末試験が終わったことを思い出した。

大学進学を見据えて本気で勉強している生徒は塾に通っているし、試験が終わってす

ぐに図書室で勉強する生徒なんているわけがない。

「……あれ、河原崎もない」

ぐるりと図書室を見渡して、お目当ての河原崎の姿もないことに気がついた。

図書室に設置されているパソコンを使っているのかと思ったが、そこにもいない。

「ま、いいか」

週末は遅くまでいると言っていたし、待っていれば現れるはず。

そう考えた俺は、待っている間にパソコンを使って記憶喰いについて調べることにした。

家にも一台、家族共用パソコンがあるが、香に占拠されていたら使えない。朝のようにスマホで調べることもできるが、やはり本気で調べるには少し難がある。

それに、記憶喰いが坂江市に関係しているなら、この場所で郷土資料をあされば情報が得られるかもしれない。ここには公共の図書館にしかないような郷土資料もいくらか置かれているのだ。さすがは文学賞作家、山形ノボルを輩出した学校だ。

「とりあえずは、本当に坂江市に関係しているか調べるために『記憶喰い』『場所』で検索してみるか」

パソコンのブラウザを立ち上げ、検索窓に記憶喰いの文字を打ち込む。

すぐさま香に教えてもらった都市伝説のまとめサイトや、個人ブログなどがずらりと表示された。

香は「噂では記憶を食べてもらった人が、もう何十人もいる」と言っていた。何十人という数字は一見多いように思えるが、噂としてネット上で成立させるにははっきり言って少ない。となると、ネットに溢れる情報ほとんどが噂話に便乗した作り話の可能性だってある。

ざっと見てみたが、一体どれが本当の情報か、まるでわからなかった。都市伝説や怪談に熟知している人間であれば判別がつくのかもしれないが、俺には無理だ。

これは香に追加課金して、調べてもらったほうがいいのではないか。

そんなことを思いつつ三〇分ほどがたち、記憶喰いという漢字がゲシュタルト崩壊しかけてきたときだった。

心地よい静寂に包まれていた図書室に、急に蟬の合唱が響いた。ようやく来た河原崎が扉を開けたのかと思って振り返る俺の目に映ったのは、意外な人物だった。

「……霧島？」

そう、クラスメイトの霧島野々葉だった。

彼女が部活に入っているかどうかは知らないが、これまで放課後に図書室に顔を出し

たことはない。

「あ」

しばらく図書館の入り口できよろきよろと見渡していた霧島と、ばっちり目が合ってしまった。咄嗟に目を逸らしたが、遅かった。

「秀俊くん、見つけ」

さすがに周りに気を使っているのか、霧島は足音を立てず、するするとこちらに近寄ってくる。

「図書室ってこんな涼しかったんだね。知らなかった」

「なんでお前がここにいるんだよ」

「ん」と……河原崎さんに聞いて」

「河原崎に聞いて？ 俺がここにいるって？」

河原崎に図書室で待っていることは伝えていない。俺がここにいることは知らないはずだ。

「あ、違う違う。朝に秀俊くんが言っていたでしょ？ マシロタイムズの企画が何になったのかは河原崎さんに聞けって」

「あゝ、確かに言ったね」

「だから、河原崎さんに聞いたの」

「……？」

いまいち会話の流れがわからない俺は、視線でさらに説明を求める。

「マシロタイムズの企画って記憶喰いでしょ？」

「そうだけど？」

「だったら私、力になれるかなあと思って。それで秀俊くんを探してたんだ」

よく見ると、霧島は汗をかいている。こんな暑い中探し回るなんて霧島はいいやつだな、などと思いつつも、なんの力になれるのだと疑惑の目を向けた。

「あ、もしかして力になれるわけないって疑ってる？」

「そりゃあね。霧島が都市伝説とかに詳しいなんて聞いたこともないからな」

「へえ、私のこと誰かから聞いたたりしてたんだ？」

「単なる噂だ」

「ふうん」

おどけるように肩をすくめる霧島。

なぜ嬉しそうにするのかわからない。普通だったら「きもーい」とか言うところだろう。そう言われたらそう言われたで、自意識過剰だと即座に突っ込むけれど。

「でも、秀俊くんが言うとおり、都市伝説とかに詳しくないのは正解かな」

「だったら、なんでわざわざ図書室まで」

「んーとね」

そうして霧島はしばらく考えた後、そつと耳元に近づいてきた。

思わずぎょつとして身を引いてしまった。

だが、霧島は周りに聞かれたくないのか、どうしても耳打ちしたい様子だった。仕方なく耳を貸すことにした俺は、おっかなびっくりで霧島の口元に耳を寄せる。苦手とはいえ、女子にここまで近づかれるのは、ちよつとドキドキしてしまう。

誰かに見られたりしてないだろうな。そんなことを心配した矢先だった。

霧島はまるで昨日食べた夕食のメニューを話すように、さらりととんでもないことを言った。

「あのね、実は私、記憶喰いに記憶を食べてもらったことがあるんだ」